大学生同士の初対面雑談会話で用いられる文末表現としての「みたいな」
── スピーチレベルとの関係に注目して ──

The Japanese Sentence–final Quotative Expression MITAINA As Observed in Conversations of First Encounter between University Students:
Its Relation with Speech Levels

嶋　原　耕　一
SHIMAHARA Koichi

〔要旨〕
本研究の目的は、大学生同士の初対面雑談会話において、どのように文末表現としての「みたいな」が用いられているのか、スピーチレベルとの関係に注目して明らかにすることである。先行研究では、「みたいな」が友人同士の会話で用いられる若者言葉として分析され、その機能が提示されてきた。そのため、これまでは普通体基調の中で用いられる「みたいな」の機能が、注目されてきたと言える。本研究では、丁寧体と普通体が混用される大学生同士の初対面雑談会話において、どのようにそれが用いられているのか分析した。その結果、丁寧体基調の場面では、①会話を盛り上げるときと、②丁寧体使用を続けては失礼になりうるときに、普通体基調の場面では①会話を盛り上げるときと、②普通体使用を続けては失礼になりうるときに、「みたいな」が用いられていることを提示することができた。

〔Abstract〕
This research aims to illustrate how the Japanese quotative expression MITAINA is used at in sentence–final position in first–encounter conversations between university students. It has been claimed that Japanese speakers use two different speech styles during first encounters: polite and plain. Because previous research has mainly analysed MITAINA in conversations between friends, in which the plain style usually predominates, the relation of this expression and speech levels has not received much attention. For the analysis, eight conversations were recorded and videotaped at a university party. Analysis revealed that MITAINA was mainly used a) when speakers got lively and b) when they might have become rude if they had continued using the same style.

Key word: 初対面雑談会話、みたいな、文末表現、スピーチレベル
conversations of first encounter, MITAINA, sentence–final expressions, speech levels

1.　はじめに

日本語には、丁寧体（デス・マス体、敬体）と普通体（ダ体、常体）という大きく二つの文末スピーチレベルが存在する。日本語母語話者（以下、母語話者）はそれらの文末スピーチレベルを巧みに使い分け、会話内でときにそれを切り替えながら、相手との心的距離の調整や話題ユニット移行の明示を行っているとされる（生田・井出 1983 など）。しかし学習者にとっては、どのような場面でスピーチレベルを切り替えればいいか判断が難しく、習得が困難であると指摘されることが多い（鈴木 1997 など）。そのような背景から、日本語教育研究の分野ではスピーチレベルについての研究が、多くの蓄積されている。また先行研究では、体言止めや言い淀み、述部の一部が省略されていることなどにより、丁寧体とも普通体とも明示されていない中途終了型発話が、自然会話の中で多く生起することも明らかになっている（陳 2000、宇佐美 2001、陳 2003 など）。そのような中途終了型発話の機能として、宇佐美（1995）は「最後まではっきり言い切らないことによって、明言を避け、発話を緩和したり、相手に発話の機会を与える」と述べている（p.35）。またスピーチレベルとの関係に注目した陳（2000）は、その機能を以下のようにまとめている。

> （丁寧体を基調とする初対面会話において）「ダ体」発話で「親」と感じていることを表し、話し相手との心的距離を縮める。しかし、いつもそうすると、かえってなれなれしい、乱暴などと受け止められることもありうる。したがって、「親」（馴れ馴れしい、乱暴等）にも、「疎」（よそよそしい、慇懃無礼等）にもならない方法が取られる。「中途終了型」発話はそのために働く。つまり、「中途終了型」発話は、「ダ体」発話寄りとも「デス・マス体」発話寄りとも解釈可能で、その両者の間に介在しており、話し相手との心的距離の調整においては、「親」と「疎」の調整機能を備えている発話である。（陳 2000、p.138）

本研究では、上記のような機能を持つとされる中途終了型発話の一つである、文末表現としての「みたいな」に注目する。それは例えば、以下のようなものである。

例 1.　文末表現としての「みたいな」（本研究の収集データより）
佐藤：すごい、なんか女の子の友だち結構多いのに、いないなと思って。そういうことか。
浅井：いやあ、嫌でしょ。嫌でしょう。
佐藤：なんか友だちとしてはいいけど、みたいな。

例 1 のような「みたいな」で終わる発話は、「みたいな気がする（します）／みたいな考えを持っている（います）」という文末を言いきらずに終了していると考えられるため、中途終了型発話であると考えられる。このような文末表現としての「みたいな」は、若者言葉の一つとされ（佐竹 1995）、これまでいくつかの研究で、その機能が分析されてきた。結果として、主に発話

内容をぼかす機能、会話を促進させる機能、相手の理解をえながら会話を進める機能、などが提示されている（前田 2004、星野 2008、メイナード 2009 など）。ただこれまでの研究では、中途終了型発話としての「みたいな」とスピーチレベルとの関係については、注目されることがほとんどなかった。その理由の一つは、それが若者言葉であり、「目上の人、初対面の人には使わない」とされてきたことである（前田 2004、p.55）。若者の友人同士の会話は、普通体を基調とすることが一般的であり、丁寧体と普通体が混用されることはほとんどない。そのため、友人同士の会話を主に対象としてきた先行研究では、データ中にスピーチレベルの混用が見られず、そのスピーチレベルとの関係について言及されることがなかったのだと考えられる[1)]。

しかし、筆者が収集した大学生による初対面雑談会話には、文末表現としての「みたいな」が多く観察された。そこで本研究では、丁寧体を基調として始まる初対面雑談会話において、どのように文末表現「みたいな」が用いられているのか、スピーチレベルとの関係に注目して明らかにすることを目的とする。丁寧体と普通体とが混用される初対面会話において、どのように文末表現「みたいな」が用いられているのか明らかにすることによって、日本語教育の中でどのようにそれを扱っていくべきか、示唆を得ることもできると考えている。

第 2 章で主な先行研究を提示し、第 3 章で研究方法、第 4 章で結果と考察について述べていくこととする。最後に第 5 章では、今後の課題と日本語教育への提言を記したい。

2. 先行研究

文末表現として用いられる「みたいな」については、いくつかの研究がその機能を明らかにしてきた。まずその基本機能は、加藤（2005）によって、「先行文脈に既出の何らかの概念（X）を取り上げ、その状態や程度を『X は、一例を挙げるならば、言わば Y だ』のような形で言語表現化して説明する」こととされている（p.50）。そして、「意見や理由の陳述の際にわざわざ、何かを言語化し状態・程度を叙述する Y ミタイナが使用されることによって」、「曖昧な情報提示という印象が際立つ結果になる」と説明されている（p.48）。例えば、「なんか友だちとしてはいいけど、みたいな。」という例 1 の発話は、「共通の知り合い A に対して意見を挙げるならば、「友達としてはいいけど」というものだ」という意味であると、解釈することができる。そしてそのような意見を叙述する際に、わざわざ「みたいな」が用いられていることによって、その意見が曖昧なものであり、覆されうるものであるという印象を、与えていると考えられる。

また前田（2004）は、「簡単なアンケート調査」により、大学生が文末表現「みたいな」に対して持つ印象と、その機能を明らかにしている。その結果、大学生は「耳にはするが、抵抗感・違和感がある表現」として「みたいな」を捉えているとされ、以下のような印象を持っているとのことである。

「「みたいな。」は「控えめな感じ」を与える一方、「あまりよい感じはしない」「軽薄そう・

軽い」「ギャル語」「不真面目」「失礼」という印象が多く指摘されていた。そのため、この表現は「親しい友人に使う」ものであり、「目上の人、初対面の人には使わない」「公式の場では使わない」と回答されている。（前田 2004、p.55）

上記のような印象を提示した上で、前田（2004）は緩衝機能、娯楽機能、イメージ伝達機能、談話機能という「みたいな」の四つの機能を提示している。各機能について、前田（2004）が引用している大学生の回答を、以下に例示したい。

緩衝機能……「自信・確信がないとき」「何となくそう思うというようなルーズな気持ち」「少し相手に厳しいこと、きついことを言ったときに、少し言い過ぎたかな、というときに使ったりする。今言ったことは冗談だよ、という感じ」
娯楽機能……「ふざけているとき」「ちょっとおもしろみを持たせる」「話がスムーズに進む」
イメージ伝達機能……「上手く言えないけど、その雰囲気を伝えたいとき」「上手くまとまっていないか、もしくは表現する能力が不足しているとき」
談話機能……「相手に確認しながら話すとき」「相手の返事を引き出そうとするとき」

緩衝機能については、他の多くの研究でも指摘されており、それは例えば「提示情報が不確実であっても（中略）提示責任を回避」したり、「否定的意見を曖昧に」したりすることで、「円滑なコミュニケーションを支える上で役に立つ」機能だと記述されている（星野 2008、p.141）。二つ目の娯楽機能については、「みたいな」に限らず引用表現一般が持つ機能として、「発話にいろいろな人の“声”を取り込むこと」によって、「会話を活性化させる」ことができると、星野（2008）が主張している（p.141）。続くイメージ伝達機能については、緩衝機能と同じものとして扱われることもあるが、発話内容が曖昧なものとして許容されるゆえの、機能であると考えられる。最後の談話機能については、例えば「なんか友だちとしてはいいけど」で終わらずに、「なんか友だちとしてはいいけど、みたいな」と発話を伸ばすことによって、相手の反応をうかがいながら発話を修正することもできるためだと、考えられる。

さらに引用表現である「って」と「みたいな」の違いを分析した星野（2008）は、「って」にはない「みたいな」の機能として、「「断定的にそのものを言い表すことはできないが、喩えていうなら、こんな感じである」という、断定を避けた情報の提供を許す」機能を挙げている（p.140）。つまり星野（2008）は、引用表現自体が持つ「会話を活性化させる」という機能を「みたいな」に認めつつも、断定を避け発話を曖昧にすることを、「みたいな」独自の機能として提示している。

以上が主な先行研究による、「みたいな」の機能についてである。第 1 章でも述べた通り、スピーチレベルと「みたいな」の関係について、言及している研究は管見の限り見当たらない。続いて次章では、研究方法について述べる。

3.　研究方法

本研究では研究方法として、宇佐美（1999）の言語社会心理学的アプローチを参考にする。まず目的に応じて条件統制したデータを収集し、それを文字化した上で、分析項目をコーディングする。コーディング結果を量的に分析し、さらに文字化資料を確認しながら質的な分析も加えることとする。

上記アプローチに従い、まず研究目的に応じた条件統制をしてデータ収集を行い、音声を文字化した。そして定めたルールに従い文字化資料をコーディングし、それを分析資料とした。以下、会話データの収集と分析項目について、詳細に見ていくこととする。

3.1　データ収集

本研究では、二者間の大学生による初対面雑談会話を録音録画し、分析対象とした。雑談会話を分析対象とする先行研究には、データ収集のため協力者を会議室に二人切りにし、会話をさせ

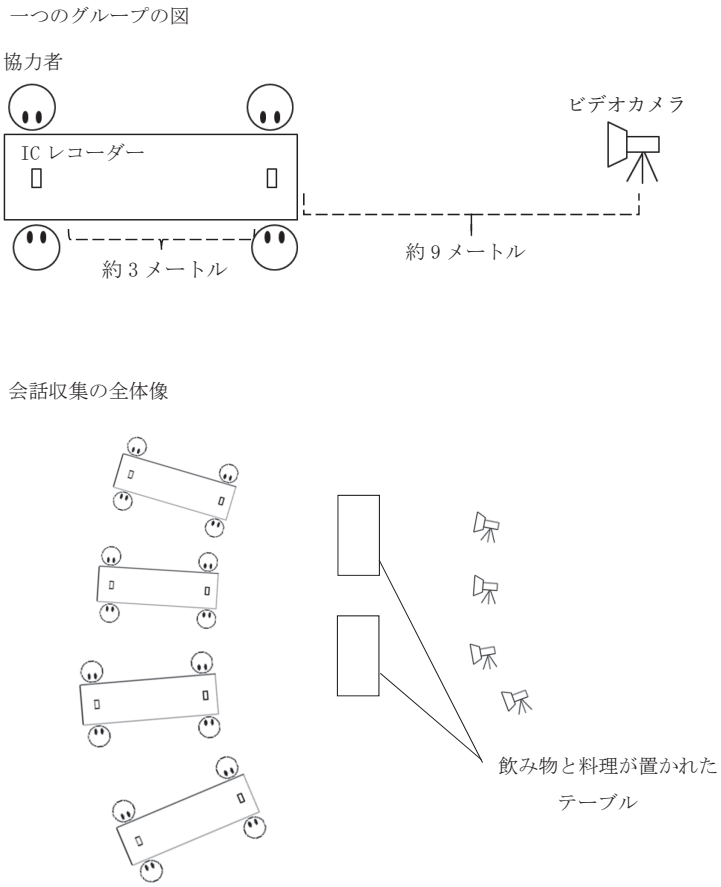

図 1　データ収集の様子

る研究が多い。本研究ではより自然な会話を収集するため、多人数による交流会場面を設定した。多人数が集まり飲み物と軽食が用意された場で、著者が指定した組み合わせで話してもらうことにより、会議室で収集する会話よりも、自然な会話が収集できたと考えている 。会話収集の様子を、図 1 に示す。

データ収集は 2015 年 6 月 4 日と 18 日に行い、母語話者同士の会話として 8 会話の初対面雑談会話を録音・録画した [2)]。当日協力者には、データ収集に関する倫理規定を記した同意書に署名してもらった後で、著者の指示により、決められた席についてもらった。そして前に座る初対面の学生と、20 分間自由に話してもらった。

収集した 8 会話のデータを基に、話者のターンを区切りとして文字化資料を作成し、分析対象とした。続いて次節では、具体的なコーディング項目について説明することとする。

3.2　コーディング項目

本研究で用いたコーディング項目は、「実質的発話／非実質的発話」「スピーチレベル」「中途終了型発話の分類」の三つである。順に説明する。

まず文字化資料の全ターンを、実質的な命題を担っているか否かで、実質的発話と非実質的発話に分類した。非実質的発話には、相づちや応答詞のみのターンが該当する。

続いて実質的発話とコーディングされたものの文末に注目し、それぞれのスピーチレベルをコーディングした。スピーチレベルの分類は、以下の表 1 の通りである。

表 1　スピーチレベルの定義と例

スピーチレベル	定義と例
丁寧体	「です / ます」及びその活用形を含む 例）学校です。行きます。行きまして。行きますから。いいです。
普通体	「です / ます」及びその活用形を含まず、形式的に丁寧体と対をなす 例）学校だ。学校ね。行く。行って。いい。きれいだ。
中途終了型	名詞や形容動詞の語幹のみ、言い淀みのある発話、述部の一部が省略されている発話など、文末が言いきられていないと考えられる」もの 例）学校。きれい。行くん…。

また、自然会話には「行きました、学校に。」や「参加しませんでした、雨だったから。」のような倒置文が見られることも多い。そのような倒置文については本来の文末、つまり「行きました」「参加しませんでした」を、スピーチレベルのコーディング対象とした。

最後に、中途終了型発話の分類を、実際の発話を見ながらコーディングした。本コーディング項目において、「みたいな」とコーディングされた発話に、本稿は注目する。

4.　結果と考察

全 8 会話の音声データから、話者のターンを区切りとして文字化資料を作成した結果、合計 2058 ターンとなった。実質的発話と非実質的発話、実質的発話のスピーチレベルの頻度と割合を、以下にまとめることとする。

表 2　8 会話の「実質的発話／非実質的発話」及びスピーチレベルのコーディング結果

	頻度	全ターンに占める割合	1 会話の平均頻度
実質的発話	1981	96.3%	247.6
丁寧体	853	41.5%	106.6
普通体	396	19.3%	49.5
中途終了型	732	35.6%	91.5
非実質的発話	76	3.7%	9.5
計	2057	100%	257.1

中途終了型とコーディングされた発話を分類した結果、本研究で注目する「みたいな」で終わっている中途終了型発話の頻度は、74 だった。74 という頻度は中途終了型 732 の 10.1%に当たり、その割合は低くないといえる。

本研究では、観察された 74 の文末表現としての「みたいな」が、どのようなスピーチレベルとともに、どのようなときに使用されているのか、質的に分析していくこととする。それでは以下、4.1 では丁寧体基調の場面で用いられた「みたいな」について、4.2 では普通体基調の場面で用いられた「みたいな」について、順に見ていくこととする。

4.1　丁寧体基調の場面における「みたいな」の使用

それでは、丁寧体基調の場面において、どのように文末表現「みたいな」が用いられていたのだろうか。分析の結果、①会話を盛り上げるときと、②丁寧体使用を続けては失礼になりうるときに、「みたいな」が用いられていると考えられた。

① 会話を盛り上げるとき

丁寧体基調の場面での文末表現「みたいな」の使用を観察したところ、後続する笑いの生起や声調の変化などから、その多くが、会話を盛り上げ、話者間の心的距離を縮めていると考えられた。以下に一つ、例を提示したい。なお、例中の丸括弧（　）は相手の相づちを、山括弧＜＞は話者の笑いに関する情報を表している。

例 2

35　大木　はい。おじいちゃん先生で、もう今年退職か、（わーお）来年ぐらいにもう退職

されるってことで。そうなんです。

36　望田　最後のゼミ生、みたいな？＜笑い＞

37　大木　そう。なんか、よか、でも、なんか、今年の、今のその、今の 2 年生が、今、ゼミ決めるときで、（うーん）で、その人が、なんか、こう、先生のゼミに入りたいんですけどみたいなことを、言われたら困るんだよねとか言いながらも、うれしそうだったので、（＜笑い＞）やっぱり、受け、受けられるのか、なんか、（＜笑い＞）許可にならなそうな気がして。＜笑い＞

38　望田　確かに。

例 2 では、「みたいな」の直後に望田による笑いが生起しており、その直後の 37 でも、両者による笑いが生じていることが分かる。笑いを生じさせたのが「みたいな」単独の機能だとは、決して言えない。しかし、中途終了型発話が「話し相手との心的距離の調整においては、「親」と「疎」の調整機能を備えている」ということ（陳 2000、p.138）、さらに「みたいな」の娯楽機能（前田 2004）を考慮すれば、36 で望田が「最後のゼミ生、みたいなことですか？」ではなく、「最後のゼミ生、みたいな？」と発話したことは、話者間の心的距離を縮める一助になったと考えられるだろう。

また、同じく会話を盛り上げていると考えられるものの中には、「みたいな」が多用され、丁寧体の使用頻度が著しく減少する例も見られた。以下にその例を提示する。

例 3

121　若菜　すごい、あそこ、いろんな団体がいますよね、本当に。

122　和木　すごいいっぱいやってるんですね。

123　若菜　＜笑い＞なんか、最初テニス部だけ、じゃない、テニス部だけのつもりだったんですけど、なんか、「サークル名 1」の新歓行ったら、なんか、予想以上に入りたくなっちゃって（あー）、入っちゃって。で、バンド、元からは、なんか、すごい興味あって。やりたいのを忙しいから我慢してたんですけど、2 年生になってから、いや、絶対後悔するなって思って、（あー、素敵ー）思い切って入っちゃったら、すごい 2 年はきつかったですね。

124　和木　す、だって、2 年生って勉強も大変ですよね、結構。

125　若菜　主専が一番なんかすごい激化する時期で。課題はあるわ、深夜練はあるわみたいな。部活もあるし、「サークル名 1」もあるしみたいな＜笑い＞。

126　和木　すごい、「サークル名 2」は、なんか、深夜練もしてるからすごいと思う。

127　若菜　なんか、深夜しか結局時間が合わないんですよね。みんなバイトとかあるし、ほかの部活入ってる人もいるし、ほかのバンドもあるしみたいな。

128　和木　あー。

129　若菜　で、寝なければ時間あるじゃんみたいな＜笑い＞。
130　和木　＜笑い＞
131　若菜　最終的（なんという）にそこに行くんですよね＜笑い＞。
132　和木　なんか、オケにも「サークル名 2」と兼部（あ、あ、あ）してる人。
133　若菜　「友人あだな 1」とか。
134　和木　あ、「友人あだな 1」＜笑い＞。
135　若菜　あー＜笑い＞。
136　和木　「友人あだな 1」、「友人あだな 1」、「友人あだな 1」ね＜笑い＞。

上記のように、例 3 では 124 まで、両者が丁寧体を基調として会話を進めている。125 では、「みたいな」が 2 回連続して用いられており、その直後に例 2 と同様、笑いが生じている。さらに若菜は、127、129 でも「みたいな」を用いており、その分丁寧体の使用頻度が減少している。一方の和木も、若菜が初めに「みたいな」を用いた 125 の直後に、スピーチレベルを普通体へと切り替えており、心的距離の短縮が見受けられる。また 128 以降は、両者の話すスピードが上がり、声も高くなっており、話者交替も頻繁になっているといえる。これらの現象からも、「みたいな」が多用されることにより、その娯楽機能によって心的距離が縮まり、会話が盛り上がっていたということができるだろう。

② 丁寧体使用を続けては失礼になりうるとき

もう一つ、観察された事例は少なかったものの、丁寧体基調の場面において、「みたいな」を用いることによって、言いにくいことを言っている例が観察された。以下に提示する。

例 4

19　平山　就活どうですか？＜笑い＞
20　原島　いや、就活きついし、（＜笑い＞）何か、私は、何か、自分のしたいことが何なのかよく分かんなくて、（うん）さまよってるから全然決まんない、みたいな。
21　平山　あ、何か、いろんな業種、みたいな？
22　原島　うーん。何か、逆に、私は、何か、勝手な自分の思い込みで、（うん）何か、食品とかって絞っちゃったん（あー）だけど、食品の営業とかって思ってたんだけど、何か、さっきもキャリアセンター。ここのキャリアセンター（ああ）の人じゃないけど。
23　平山　あ、違うんですか？
24　原島　そう。み、民間の（へー）キャリアセンターみたいなとこの人に。何か、就活エージェントとかいう。
25　平山　契約してってことですか？

上記の例 4 では、原島と平山により、「みたいな」の発話が連続している。まず例を読んで分かるように、データ収集を実施した 2015 年 6 月、学部 4 年生の原島は就職活動中であった。そしてその状況についての平山の質問から、例 4 は始まっている。20 は質問への原島の回答であるが、「何か、私は、何か」の部分や「分かんなくて」の部分では、音声的な言い淀みが見られ、原島が何と答えるべきか考えながら話していることがうかがえた。そのような発話の文末で「みたいな」が用いられているのは、前田（2004）が主張する緩衝機能と、関連深いと考えられよう。つまり、自身の発話に自信がないために明言を避けようと、原島が「みたいな」を用いている可能性が考えられる。

続いて 21 では、20 の原島による「みたいな」に続くかたちで、平山が「みたいな」を用いている。「みたいな」の連続については例 3 でも見たが、例 3 で会話の盛り上がりが確認されたのに対して、例 4 ではそのような盛り上がりや話者間の心的距離の短縮は確認できなかった。上で述べたように、20 では原島が、「みたいな」の使用により自身の就職活動の状況についての明言を避けている可能性がある。そのため 21 の時点で平山は、原島が初対面会話における就職活動という話題に積極的でない可能性を、察していたかもしれない。そうであるならば、平山が 21 で「みたいな」を用いたのは、相手に話したくないことを話させてしまっているかもしれないことを、自覚していると示すためだと考えられよう。

つまり躊躇していることを明示しなければ、失礼になるかもしれない場面で、話者は「みたいな」を用いてその躊躇を示していると考えられる。スピーチレベルの観点からは、丁寧体の方が中途終了発話よりも「疎」であり、丁寧だと主張されることが多いが、この場合は中途終了型発話を用いることで、相手に失礼になることを回避していると考えられた。

4.2　普通体基調の場面における「みたいな」の使用

続いて普通体基調の場面における、「みたいな」の使用について見ていきたい。ここでの普通体基調の場面というのは、一時的に両者が普通体を複数回用いている場面という意味である [3)]。

分析の結果、普通体基調の場面では、①会話を盛り上げるときと、②普通体使用を続けては失礼になりうるときに、「みたいな」が用いられていると考えられた。①は、4.1 で丁寧体基調の場面の用法として提示したものと同様である。また②も、基調とするスピーチレベルこそ異なるものの、失礼になることへの懸念を話者が持っている、という点では 4.1 で見た「丁寧体使用を続けては失礼になりうるとき」と同様である。以下、順に見ていくこととする。

① 会話を盛り上げるとき

まず「会話を盛り上げるとき」については、先に見た丁寧体基調の場面における例 2 及び例 3 と、同様の機能を「みたいな」が果たしていると考えられる。下に例を示す。

例 5

250　浅井　みんなで、「え、モデルさんみたいなかわいい子だよね」って言ってさんざんいじってたんですよ。「うるさい」つって言われたけど。
251　佐藤　え、でも【友人 2 姓名】、なんかベト科では、（うん）1 年生の頃はちょっとだけもててて。
252　浅井　確かに。すれてなくて。かわいい。
253　佐藤　そう、ちゃらくなくて、かわいげがあって、そこそこ気が遣えるっていう。
254　浅井　＜笑い＞全部なくなった。
255　佐藤　で気は、微妙に。あでも最近なんか、妙にテンション高いからな。
256　浅井　めんどくさいやつ。
257　佐藤　なん、朝からテンション高くて、何、デート？みたいな＜両者の笑い＞。
258　浅井　ネタになってるじゃん、それ。そうなんだ。＜笑い＞
259　佐藤　えだから、これからあれですよね、語劇の後の打ち上げ、確か場所が一緒で。

上記を見ると、250 から普通体と中途終了型発話が用いられており、259 の「これからあれですよね」という発話以外では、丁寧体が生起していないことが確認できる。このように普通体を一時的に基調としている場面の 257 で、「デート？みたいな」という発話があり、その直後に両者による笑いが確認できる。続く 259 を見ると、新しい「打ち上げ」という話題が導入されていることから、257 ～ 258 は「共通の友人の近況」という話題の終了部だと解釈できる。そのような終了部において、佐藤の心情を導入するために「みたいな」が用いられていることで、その心情を直接、臨場感を持って導入し、当該話題のクライマックスを作る一助となっていると考えられる。ここで注目すべきは、スピーチレベル研究では中途終了型発話よりも普通体の方が「親」であると考えられる一方で、例 5 の「みたいな」の中途終了型発話が、普通体基調の中で笑いが生起するきっかけとなっていることである。これは「みたいな」の持つ、娯楽機能によるものだと考えられる。

② 普通体使用を続けては失礼になりうるとき

次に見る「みたいな」は、自身の心情を述べる際にそれが用いられているという点については、例 5 と同様である。ただ異なるのは、その心情部分の表現の丁寧度が極端に低いと考えられることである。下にその例を、二つ提示する。

例 6

256　原島　結構韓国の手術、何か、事故とか多くて。（そうなんですか）目、失明したとか。何か、鼻腐ったとかも聞いたし。
257　平山　怖い。＜笑い＞

258　原島　＜笑い＞何か、中国人が韓国でやったら、＜笑い＞鼻腐っちゃったとかって。＜笑い＞
259　平山　怖い。＜笑い＞鼻腐るとか想像（うん）できない。
260　原島　いやー、無理。あー、鳥肌立つわ、みたいな。（うん）
261　平山　日本のほうが特別かもしれない。そういう何か。

例 7

134　浅井　LA で、あ、そう、LA に、ディズニーランド一緒に行ったんですけど、（うーん）なんか【大学名】生いっぱいいたから、（はいはいはいはい）それ、え、ランド行こうよみたいな、（おお、おお、おお）LA 行こうよってなって、誘って、8 人ぐらいで、8 人じゃないな、10 人ぐらいで行って、（はい）みんな【大学名】生。＜笑い＞
135　佐藤　めっちゃいっぱいいる。
136　浅井　【大学名】生だったんだけど、でもそれで、その前に一人で LA 行って、ティファニーの前でベーグル食ってる写真を（あら）タクシーの運転手さんに撮ってもらったって言って、ニヤニヤしてて。
137　佐藤　腹立つー＜笑い＞
138　浅井　お前がやってどうする、みたいな。
139　佐藤　なんか、お前じゃないんだな、みたいな。ま、まだ【友人 2 姓名】君のほうがいいかな、みたいな。
140　浅井　＜笑い＞確かに。

上記のように、例 6 では「鳥肌立つわ、みたいな。」という発話において、例 7 では「お前がやってどうする」「お前じゃないんだな」という発話において、「みたいな」が用いられている。まず前者の引用部「鳥肌立つわ」についてであるが、先行研究によって、普通体に終助詞が付加されるかたちは特に丁寧度が低いことが、明らかになっている（佐藤・福島 1998 など）。佐藤・福島（1998）は、終助詞の付加された普通体発話が、「相手への働きかけの機能を持つことで、待遇レベルの低い普通体表現を相手に直接投げかける」ために注意すべきであると、非母語話者に対して注意を促している（p.37）。例 6 の「みたいな」は、自身の心情を率直に表現しながら、「待遇レベルの低い普通体表現を相手に直接投げかける」ことを防いでいると考えられる。例 7 についても「お前じゃないんだな」に終助詞「な」が用いられていること、「お前」という丁寧度が極端に低い語彙が用いられていることが、特徴として挙げられる。例示部分では普通体を基調としているとはいえ、初対面会話であることには変わりなく、友人同士の会話に比べれば、話者は自らの言動が相手にどのような印象を与えるのか懸念していると考えられる。例 6 及び例 7 では、そのような初対面会話の一時的に普通体を基調としている場面で、話者が丁寧度の低い語

彙を弱めたり、相手に強く働きかける普通体表現を避けたりするために、「みたいな」を用いていると考えられた。

以上が、本研究で観察された「みたいな」の用いられ方と、スピーチレベルとの関係についてである。

5. おわりに

本研究では初対面雑談会話を対象とすることで、初対面会話であっても「みたいな」で終わる中途終了型発話が使用されていることを提示し、そのスピーチレベルとの関係に注目した。結果として、丁寧体基調の場面では、①会話を盛り上げるときと、②丁寧体使用を続けては失礼になりうるとき、普通体基調の場面では①会話を盛り上げるときと、②普通体使用を続けては失礼になりうるときに、「みたいな」が用いられていることを提示することができた。先行研究では普通体を基調とする友人会話において、「みたいな」が用いられるとされてきたが、丁寧体を基調とする初対面会話にも多く用いられることを提示できたのが、本研究の成果の一つである。また丁寧体基調の場面における「みたいな」の②については、丁寧体を用いて直接的に質問しては、相手の領域に踏み込み過ぎると考えられる項目について、躊躇を示しながら尋ねるためのストラテジーの一つとして、「みたいな」が用いられうると示唆することができた。親疎の観点から見れば、この「みたいな」の使用は丁寧体よりも「疎」の方向に、発話を調整していると考えられる。これらの発話例を提示できたことは、スピーチレベルとの関係に注目したからこそであり、意義深いと考えている。そして、本研究で観察されたような「みたいな」の諸機能を、談話とともに日本語学習者に提示することは、その学習を促進するために非常に重要だろう。

ただ、本研究で扱ったのはあくまで大学生間の初対面会話であり、他の母集団を分析対象とすればまた違う結果が出ることに注意されたい。若者言葉とされる「みたいな」は、特に話者の世代によって、大きく使用状況が異なるだろう。今後の課題としたい。

注

1） 唯一加藤（2005）が、初対面会話から二つの「みたいな」の例を挙げているものの、スピーチレベルとの関連については言及されていない。

2） データ収集に当たっては、他の研究で用いることも想定していたため、母語話者同士の会話 8 会話の他に、母語話者と非母語話者による二者間初対面雑談会話も、32 会話収集した。ただ本稿では、母語話者同士の会話のみを分析対象とする。

3） どのように基調スピーチレベルを同定するのかは、先行研究によって様々であり、その基準を明記していない研究も多い。本研究では 10 ターン以上に渡って丁寧体が観察されず、かつ普通体が複数回観察される場面を、普通体基調の場面として同定した。

参考文献

生田少子・井出祥子（1983）「社会言語学における談話研究」『月刊言語』12 巻 12 号、77–84.

宇佐美まゆみ（1995）「談話レベルから見た敬語使用 ── スピーチレベルシフト生起の条件と機能 ── 」『學苑』662 号、27–42.

宇佐美まゆみ（1999）「談話の定量的分析 ── 言語社会心理学的アプローチ ── 」『日本語学』18 巻 10 月号、40–56.

宇佐美まゆみ（2001）「ディスコース・ポライトネス」というか点から見た敬語使用の機能敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆すること」『語学研究所論集』6 号、1–29.

加藤陽子（2005）「話し言葉における発話末の「みたいな」について」『日本語教育』124 号、43–52.

佐竹秀雄（1995）「若者ことばとレトリック」『日本語学』14 巻 11 号、53–60.

佐藤勢紀子・福島悦子（1998）「日本語学習者と母語話者における発話末表現の待遇レベル認識の違い」『東北大学留学生センター紀要』4 号、31–40.

鈴木睦（1997）「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」田窪行則（編）『視点と言語行動』くろしお出版 pp.45–76

陳文敏（2000）「日本語母語話者の会話に見られる「中途終了型」発話 ── 表現形式及びその生起の理由 ── 」『言葉と文化』1 号、125–142.

陳文敏（2003）「同年代の初対面同士による会話に見られる「ダ体発話」へのシフト ── 生起しやすい状況とその頻度をめぐって ── 」『日本語科学』14 巻、7–28.

星野祐子（2008）「コミュニケーションストラテジーとしての引用表現 ── 発話末の「みたいな」の表現効果 ── 『人間文化創成科学論叢』11 巻、133–142.

前田直子（2004）「文末表現「みたいな。」の機能」『月刊言語』33 巻 10 号、54–57.

メイナード、泉・K（2009）『ていうか、やっぱり日本語だよね 会話に潜む日本人の気持ち』大修館書店